

『両手にトカレフ』 ブレイディみかこ

大ベストセラー『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』の著者、初の小説！『ぼくイエ』を読んだ息子に「これは幸せな少年と幸せな学校の話だね。でも学校にはクラブ活動すらできない子もたくさんいる。そういう子たちはこんなにエンジョイしてないと思う」と言われショックを受け、『ぼくイエ』では描けなかった子たちの姿を小説というかたちで描いたのだそうです。「私たちの世界は、ここから始まる」。舞台は現代のイギリス。14歳の主人公・ミアは、働かず酒とドラッグに溺れる母と弟の3人家族。食事にも事欠き、短くなってしまったスカートをはき、スマホも持てないほど困窮している彼女は、公共図書館が居場所となっていました。その日も図書館にいと、長髪でひげぼうぼうのホームレスらしき男性が読んでいた青い表紙の本になぜか心を惹かれます。手に取ると、それは日本の大正期のアナキスト（無政府主義者）金子文子の自伝でした。彼は「君のような女の子が読んだら面白い本だと思うよ」と言います。大逆罪で死刑判決を受け、わずか23歳で獄中死した金子文子は、親に棄てられ、無国籍児で学校にも通えず、壮絶な少女時代を送った人でした。だが、彼女は「きっとこことは違う世界がある」と信じ続けた人だったのでした…。「ミアも出欠の返事をするとうちに机の下で読みかけの本を開いた。隣に座っているレイラや、この教室に座っている誰よりも、その本に出てくる少女のほうがミアには近く感じられた」。ラストで、ここではない世界に行きたいと思っていたミアは、ここにある自分の世界を変えられることに気づきます。そこにはNOばかりだと思っていた世界で、YESと言ってくれる人がいたのでした。

『今夜、この世界からこの恋が消えても』 一条 岬

道枝駿佑（なにわ男子）・福本莉子主演で映画化！「一日ごとに記憶を失う君と、二度と戻れない恋をした」。イジメをやめさせる替わりにまるで知らない女の子だった日野に嘘の告白をさせられた透は、「本気で好きにならないこと」を条件に思いがけずOKされ、彼女とつきあうことに。偽りの恋が本物に変わったころ、日野から打ち明けられる。「病気なんだ私。前向き健忘って言って、夜眠ると忘れるの。一日にあったこと、全部」。

『プロジェクト・ヘイル・メアリー』 アンディ・ウィアー

「はやぶさ2」が生命誕生の謎をまさに解き明かそうとしているいま、ぜひ読んでもらいたい本！ 映画『オデッセイ』原作『**火星の人**』の著者の最新作です！ コンピューターの声に起こされ、目覚めるとグレースは真っ白な奇妙な部屋にいた。裸でたくさんの管につながれ、ロボットアームに世話されて、ずいぶん長いあいだ眠っていたらしい。同じ部屋にはかなりの時間が経った死体が二つ。自分の名前すら思い出せないくらい記憶が朦朧としていたが、教師だった彼は「実験」をすることでここが地球ではないことを確信する。宇宙船<ヘイル・メアリー>号のなかにいるのだ。断片的に蘇る記憶。採取された未知なる生命体「アストロファージ」が太陽エネルギーを喰らいつくそうとし、地球は存亡の危機に瀕している。自分はそのアストロファージ問題を解決するために、別の太陽系へと派遣されたのではないか？ 人類を救うことができるのは、自分ひとりだけなのだ。ところが、ヘイル・メアリー号に思わぬ来訪者が…。「なあ、きみはもうひとりじゃないぞ、バディ」「ぼくら二人ともな」。

☆『空白を満たしなさい』 平野啓一郎

映画『**ある男**』の公開を秋に控える平野啓一郎の傑作が、NHKでドラマ化！ 十年前、東日本大震災の直後に発表された作品。「……落ちる！」恐怖に駆られて土屋徹生が目を覚ますと、そこは夜の会社の会議室だった。記憶がない。家に帰ると、妻に「あなたは三年前に死んでいる」と言われる。新聞の日付を見たり、テレビをつけたりして確認しても信じられなかったが、確かに1歳だった息子が4歳になっているのだった。「復生者」。テレビやネットには、死んだはずの人間が世界中で蘇っているというニュースが溢れていた。一度死んだ彼は、その復生者なのだった。徹生は会社の屋上から転落死したのだという。残された手帳には「いやだ」と書かれ、妻は自殺したのだと思っていた。「単に生き返ったのではなかった。自分の死が壊してしまった世界に生き返ったのだ」。自分が自殺をしたなんてまったく信じられない。徹生は彼を逆恨みしていた警備員の佐伯に殺されたのではと疑う。「なんで俺は、こんなに必死で働いているんだ？」「あなただって、本音では、人生にがっかりしているんですよ」。佐伯は生きることの虚しさを考えさせる毒のような言葉を徹生に注ぎ込んだのだった。ささやかな家庭での幸せを根本から否定するような。「どうして俺は、この幸せを疑うことが出来るんだ？.なんでこの幸せで十分じゃないんだ？」徹生は何を思いながら死んだのかを思い出す。「生きたかったんだよ」。

『^{まゆずみ} 黛家の兄弟』 砂原浩太郎

「美しく生きるとは何か」を問う時代小説の伝統を、この一冊で確実に受け継いだ。昭和の藤沢周平、平成の葉室麟、そして…。デビュー2作目の『^{たか}高瀬^せ庄^{しやう}左衛門^{さゑもん}御留書^{おとどめがき}』で、時代を代表するビッグネームと並べて語られるようになった著者の「神山藩」シリーズ第2弾が山本周五郎賞を受賞！ 妻に先立たれた下級武士を描き、枯れた印象の強かった前作とは一変し、17の少年が主人公の今作ですが、驚くほどにその印象は変わっていません。静謐で清らかなのです。「ひとの心もちには応えよ」。藩の筆頭家老を務める黛家の三男の新三郎は、仲のよいふたりの兄にかわいがられ、道場仲間の親友・圭蔵とは変わらぬ友情を誓い、幸福な少年時代を満喫していた。だが、そのような日々が永遠に続くはずはない。長兄の栄之丞が藩主の次女と婚儀をあげることになり、真三郎も婿入りすることになる。次兄の壮十郎を差し置いて自分なのは、先方の所望なのだという。くすぶる壮十郎は屋敷を出て、はぐれ者たちとつるんで<花吹雪>の名乗りを上げ、敵対する<^{いかづちまる}雷丸>の頭目・伊之助を私闘で殺してしまう。伊之助は次席家老の嫡男であり、ただでは済まされなかった…。「よき政とは、なんだと思う」「だれも死なずにすむ、ということでござろう」最良の時代小説でありながら、先行するほかのどの時代小説とも違ったきらめきをみせます。

『こちらあみ子』 今村夏子

芥川賞作家の太宰治賞&三島由紀夫賞W受賞の衝撃のデビュー作が映画化！ あみ子は変わっている。前歯が3本ない。ずっと好きだった男の子に「好きじゃ」と告白したら、こぶしで殴られて折れてしまったのだ。この本は、15歳で祖母と二人っきりで暮らすようになるまでを、あみ子の視点から書いた本です。お母さんに赤ちゃんができ、誕生日にももらったトランシーバーでいっしょにスパイごっこをするのを楽しみにしていたが、赤ちゃんは生まれなかった。あみ子は、金魚のお墓の隣に「弟の墓」をつくってしまい、お母さんの心を壊してしまう…。

『プロパガンダゲーム』 根本聡一郎

「君たちには、この戦争を正しいと思わせてほしい。そのため的手段は問わない」。プロパガンダ。かつて行われ今も行われている宣伝による洗脳。大手広告代理店の就職試験を勝ち上がった大学生8名に課された課題。それは、プロパガンダによって仮想国家の国民を戦争へと導けるかどうかを争うゲームだった。「政府チーム」と「レジスタンスチーム」、勝つのはどちらか。

『その扉をたたく音』 瀬尾まいこ

読書感想文課題図書！（あとの2冊は、『**建築家になりたい君へ**』隈研吾と『**クジラの骨と僕らの未来**』中村玄です。）本屋大賞受賞作 & 映画化『**そして、バトンは渡された**』の瀬尾まいこさんの作品。ミュージシャンに憧れながら、大学を卒業して7年も無職のままで、裕福な父親の仕送りで暮らしている29歳の宮路は、演奏に訪れた老人ホームで神がかったサックスの音を耳にする。吹いていたのは、ホームの職員で介護士の渡部だった。もう一度その音色を聴きたくて、何かと理由を見つけてはホームへと通う宮路は、いつしかホームの老人たちの買い物を頼まれるようになり、口の悪いおばあさんに「ぼんくら」と呼ばれ、足繁く通うようになる。入居者とも渡部とも仲よくなった宮路は、やがて渡部のサックスに夢中になった理由を知る…。「俺だけが真ん中にいた世界は、もう終わったんだ」。

『作家たちの17歳』 千葉俊二

高校時代、特に17歳をどう生きるかが、その後の人生を決定づけるということがあります。この本は、あの文豪たちが17歳をどう生きたかをまとめた新書です。「十六になったら、僕という人間は、カタリという音をたてて変わってしまった」。日記の始まりに「自覚して、立ち、戦おうとしている」と書き、作家になる揺るがぬ決意をしていた太宰治。中学を卒業してすぐ入院し、毎朝検温に来る看護婦に恋をした宮沢賢治。中学時代の集大成として書いた「義仲論」で、「木曾の野人」義仲への共感、「野生の美しさ」「野蛮」への憧れを告白していた芥川龍之介。裕福な家に生まれたが父が事業に失敗し、中学二年から高校二年まで書生兼家庭教師として住みこみで働き、小間使いとの恋愛が発覚して追い出された谷崎潤一郎。農民の父を喪い、十七歳で女戸主として自身と母と妹の命運を握ることとなり、結婚話もなしになってしまう樋口一葉。腹膜炎で学期試験を受けられず、追試験を受けようとしたが相手にされなかったことに立腹し自分から落第して、その後、首席を通した夏目漱石。文豪六人だけでも、六者六様。キミの17歳をどう生きるかの参考に。

◎今日から、夏休みのあいだじゅう好きなだけ本が借りられます！

————— セーやさんは17歳で『**失われた時を求めて**』に出逢ってフランス文学科を志望し、東京に出て「運命の書店」と魔書『**アリス狩り**』と生まれて初めて「着たい！」と震えた Luna Mattinoに出逢い、いまに到ります。では、図書館で。